

いわての“大地”と “ひと”と共に



<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/newsletter.shtml> <岩手大学ホームページからもご覧いただけます。>

国立大学法人 岩手大学
地域連携推進部
地域創生推進課

〒020-8550
岩手県盛岡市上田 3-18-8
TEL.019-621-6629
FAX.019-621-6999
E-mail. sanriku@iwate-u.ac.jp

平成 29 年 3 月 27 日発行

date
1.12~
14

大平中学校での冬期学習支援

学習支援班では、1月12～14日の三日間、釜石市立大平中学校(生徒数114名)で学習支援のボランティア活動を行いました。

これまで学習支援班は、震災直後から同市の唐丹小学校で夏冬の長期休業期間中の学校開放事業に取り組んできました。今回は相互友好協力協定締結自治体である釜石市から岩手大学に派遣されている井上共同研究員が学習支援班と大平中学校のニーズを繋ぎ、冬期休業学習ボランティアを行う運びとなりました。

桐の葉学習会と銘打ったこの取り組みは、学習支援を通じて、学力向上及び学習意欲の向上を図ること以外にも、大学生との交流により、生徒に高等教育機関への興味・関心を持ってもらうことも目的のひとつです。

初日の開講式では、参加した学生がそれぞれ自己紹介すると共に、大平中学校からは大平ソーラン実行委員による「大平ソーラン」が披露され、参加した学生も中学生の勇壮な踊りを楽しみました。

その後の学習会では、参加した1学年から3学年の生

徒が持ち寄った課題を自主学習し、不得意教科を大学生が質問に答える形で進行。初日は、双方とも少し距離感がありましたが一緒にお弁当を食べたり、学習の合間に体育館で運動したりとコミュニケーションを積極的にとつたため、次第に打ち解けていき、学習以外でも大学生活や中学生活の話題で盛り上がりました。

最終日の閉講式では、生徒会から参加学生へ感謝の言葉が述べられるとともに、学生からは中学生に宛てた応援メッセージ入りの寄せ書きを贈りました。

参加した学生からは、「中学生の視点で教えるのは難しかったけれど、二日目からコツが掴めた」、「帰りに中学生がバスまで見送りに来てくれて感激した」。中学生からは「大学生から教えてもらうのは初めてだが、本当に分かりやすかった」、「とても丁寧に教えてもらった」などの感想が寄せられました。

事前に申し込んだ中学生は23名でしたが、参加者の口コミもあり、最終的には三日間で延べ97名の生徒が参加し、好評な学習支援ボランティアとなりました。



ボランティア学生による学習風景



学習の合間、体育館でのレクリエーション



閉講式での記念写真

参加学生の声



工学研究科 2年 室田 大気さん

私はこのような学習支援には初めて参加しました。参加した理由は、普段の生活が大学の研究室主体であり、自身の成長を図るために違う環境に身を投じようと考えたためです。そのため、普段は中学生と接する機会は全く無く、ど

のように接すればいいのか始めは緊張しました。しかし、教員の方々や中学生の皆さんが接しやすい環境を作ってください緊張をほぐすことができました。3日間と短い期間でしたが、中学生と触れ合う中で日常では気に留めないような素朴な疑問について考えたり、一緒に運動をすることでエネルギーをもらったりなど非常に有意義な時間を過ごすことができました。

大平中学校の皆さんに大学生とはどのようなイメージを持っているか聞くと、大半が「かた苦しい」、「勉強好きで真面目」なイメージと答えました。真面目というのには良い部分ではありますが、ここで言う真面目とは接しづらいというイメージで、要するに大学生というイメージに壁を感じていたのだと思います。今回の活動によってそのようなイメージが少しでも払拭できていれば幸いです。それに伴い大学という存在を身近に感じ、将来の選択肢の一つに大学進学が増えると嬉しいです。語弊の無いように言いますが、大学生は基本的に真面目な人が多いですが、勉強しかなしではなく、運動や趣味など文武両道を行っている人が多いです。

私は4月から社会人になります。教育関連の職ではないため直接的に今回の活動の経験を仕事に活かすことは難しいかもしれませんが、この貴重な体験は必ず糧になると思います。なので、大学生の皆さんにも大学のみの活動ではなく、学部

の枠にとらわれずに学外の活動に参加することで、将来の視野を広げていって欲しいです。

最後となりますが、この活動は中学生と大学生ともに成長できる良い場であると思うので、今後も活動を継続していけることを願っています。

中学生の声



大平中学校 3年 平野 壮真さん

僕は三日間の桐の葉学習会に全て参加しました。実は、最初は母に言われて渋々参加したのですが、出てみてとてもよかったと思っています。始める前はどんな人たちが来るのか少し不安もありましたが、大学生の皆さんがとても優しい人たちで安心しました。

実際に勉強を見てもらっていると、分からない所を丁寧に教えてくれてとても助かりました。自分の専門の教科以外の教科も教えてくれました。大学生の皆さんの教え方は一人ひとりに合わせた方法で、とてもわかりやすかったです。

また、勉強以外にも、休み時間にキャッチボールをしたり、バレーボールやドッチボールで交流したりできて良かったです。今は部活動も引退し、あまり体を動かしていなかったのも、とてもよいリフレッシュになりました。

僕に数学を教えてくれた人は、将来中学校の教員になって野球を教えたいと考えていて、そのために、今は硬式ではなく軟式野球部に入っているということでした。自分の夢のために努力していることをすごいと思いました。今回、来ていただいた大学生の皆さんは教員志望だと聞きました。なんとなくですが、三日間一緒に勉強してみて、皆さんはいい先生になると思いました。

僕は三日間の学習会に全て参加して、本当によかったと思います。おかげで勉強もだいぶわかるようになりました。少しですが、テストで結果につながったように思います。また、大学生のみなさんに会いたいと思います。

date
1.28

総合科目特別講義「三陸の復興を考える」で沿岸研修を実施

岩手大学では、震災復興に関連する科目として、総合科目特別講義「三陸の復興を考える」を開講しています。

三陸復興・地域創生推進機構の教員が、水産分野、ものづくり分野、農業分野、心のケア分野、地域コミュニティ再建分野等、多岐にわたる分野をリレー形式で講義を担当。



1月28日に実施した今回の沿岸研修は、現地に向き、被災地の状況を実際に学ぶことでこれまで講義で学んできた内容をさらに深化させるものです。現地での案内は交流人口の増加を通じて陸前高田市の活性化を目指している一般社団法人マルゴト陸前高田に協力いただきました。

参加学生は、最初に復興まちづくり情報館に到着。一般社団法人マルゴト陸前高田の越戸氏から震災前後の陸前高田市の概要説明を受け、隣接している震災遺構「道の駅高田松原タピック45」を見学。学生達は、津波の被害を受けた建物とその先に見える10メートルを超える盛り土で宅地造成している中心市街地とを対比して、津波の破壊力と地域住民に与える被害の大きさを改めて認識しました。

その後の昼食時間では、同市米崎町の生産者が震災直後立ち上げ

た「産直はなます」で地元の野菜を中心としたお弁当を通じて、地元生産者の食を通じた復興への想いを感じました。

最後は、避難所としても使われた気仙大工左官伝承館を会場に、「岩手大学と他大学の強みと弱み」、「学生と社会人の強みと弱み」というテーマでグループワークに取り組み、それぞれの立場から視点を変えながら意見を出し合いました。

被災地研修を振り返り参加学生からは、「事前に震災の状況や岩手大学が横断的に取り組んできた活動内容を講義で学んできたので、現地視察では、より深く考えることが出来た」、「現地で活動しているNPOの方のお話を伺って良かった」などの感想が寄せられ、学生にとっても有益な研修となりました。



道の駅陸前高田松原タピック45で説明を受ける学生



道の駅陸前高田松原タピック45の屋上から見た中心市街地

グループワークで出された主な意見

テーマ1. 岩手大学と他大学の強みと弱み

岩手大学		他大学（特に首都圏）	
強み	弱み	強み	弱み
今でも震災を身近に感じられる機会が多い	被災地に近い分、関心が高い人と低い人のモチベーションの差がある	岩手への関心・興味が高そう	意識が薄れていきそう（風化）
多くの先生が復興に携わっている	ローカルで主観的な考え方に偏る場合も	企業や大人と連携しやすい	地理的に遠いので地域の人と繋がりをつくりにくい

テーマ2. 学生と社会人の強みと弱み

学生		社会人	
強み	弱み	強み	弱み
新しい発想が生まれやすい	社会人に比べ予算規模が大きい活動ができない	経験豊富であり資格を持っている	固定観念がある
被災地で学ぶ機会と自由になる時間がある	まだ社会に出ていないので社会背景や状況が分かっていない	規模の大きい活動が出来そう	長時間のボランティア活動が難しそう



沿岸研修のねらい・担当教員から



三陸復興・地域創生推進機構
三陸復興部門地域コミュニティ再建支援班
人文社会科学部 教授 五味 壮平

今年度から総合科目特別講義「三陸の復興を考える」のコーディネータを担当することになりました。履修者は51名とかなりの数になりました。授業内容は、東日本大震災における被災の状況、現時点での復興状況、そして将来に向けた課題などを概観した後、岩手大が震災後に行ってきた取組をいろいろな先生方に語っていただくというものでした。僕もすべての講義を聞かせていただきましたが、濃い内容であったと思っています。

教室で講義を聞くことに加え、実際に復興に向けて歩んでいる場に赴き、地元で日々奮闘している方々と対話することで、感じられるリアリティはまた全く異なります。今年度は授業のオプションとして、履修者の中から希望する学生さんたちを対象として、陸前高田市への研修

を実施させてもらいました。まさに日々風景が変わりつつある状況に関する説明を受けた後、現場にいる側からみて大学や大学生に期待すること、考えてほしいことなどについて2名の若者から話を受けました。その後、岩手大学の学生であるという自分たちの立場を見つめなおし、考えることができるような時間を作ってもらいました。参加した学生の中には、強い刺激を受けた学生も多かったと考えています。

この研修直後の授業最終回では、自分たちごととして捉えてもらいたいという意図でグループワークを実施しました。震災直後だとして、あるいは約6年たった今、「なにをすべきと考えるか？/なにがしたいか？/なにができるか？」をグループごとに考えてもらいました。また、授業全体を振り返って印象に残ったことを共有してもらいました。（震災という出来事や復興への取組などへの心理的）距離が縮まったような気がすると発表したグループがあったのが印象的でした。

震災からの時間が経過していますが、いやしているからこそ、地元の国立大学として、この授業を実地研修も含めて来年以降さらに充実させていければと思っています。

date
1.21

八幡平市で車座研究会「地域の安全を考えるワークショップ」



車座研究会の趣旨を説明する越谷副センター長

相互友好協力協定締結自治体である八幡平市は、市内における土砂災害危険箇所や避難場所、防災情報等を掲載した「防災マップ」を作成し住民に配布するなど、日ごろから防災に関する取り組みに注力しています。

今回は、八幡平市から派遣され岩手大学に常駐している佐々木共同研究員と八幡平市寺田地域振興協議会との企画で、1月21日に同市西根寺田地区在住の住民を対象に車座研究会「地域の安全を考えるワークショップ」を開催しました。

八幡平市寺田地域振興協議会は、昨年度、地域防災研究センター（三陸復興・地域創生推進機構地域防災教育研究部門）と連携し、地域の子どもからお年寄りまでが、自然災害・火災・交通事故等から身を守り、安心安全に暮らせる地域を目指すため、住民が主体と

なって「地域防災マップ」を作成。

今年度は、さらに地域の防災機能を高めるため、自主防災組織立上げに向けて検討を開始したことから、今後の地域防災への取り組みや自主防災組織について考えるべく、今回のワークショップの開催となりました。

当日は、地域防災研究センターの越谷副センター長の他、多数の教員が参加し、過去の調査で得た具体的な台風災害や土砂災害の事例やタイムライン（防災行動計画）の活用方法及び避難すべき注意点など、今後必要とされる情報をわかりやすく紹介する講演を行いました。

その後、参加者は、複数のグループに分かれて、災害時の行動についてシミュレーションを行うワークショップに取り組みました。参加者自身が、災害時に起こりうる様々な状況の当事者となりきって難しいことを判断することで、様々な考え方を共有する機会となりました。

参加者から「難しい判断だったが、立場の違いで考え方が変わる」、「地域防災については、やっぱり地元が考えるべきだ」などの感想が聞かれ、主催者、参加者とも日頃の防災意識の重要性、さらにそれを継続して取り組んでいくことの大切さを痛感し、改めて地域の安全を考えるととても良い機会となりました。



グループワークで熱心に話し合う参加者

date
1.21~
22

平泉文化フォーラム

平泉文化研究センター（三陸復興・地域創生推進機構平泉文化教育研究部門）は、奥州市市民会館を会場に1月21～22日（聴講者：述べ400名）の期間、岩手県教育委員会及びいわて高等教育コンソーシアムと連携して、第17回平泉文化フォーラムを開催しました。



主催者挨拶を行う小川理事

このフォーラムは、平泉文化研究の先端的調査研究成果を広く一般の方に公開する場として平成12年度から実施しており、本年度は、「平泉の文化遺産」の世界遺産登録5周年記念フォーラムと位置づけて開催。フォーラムに先立ち、主催機関の一つであるいわて高等教育コンソーシアムを代表し、岩手大学の小川理事が、「本フォーラムを通じて平泉文化への理解が深まるとともにさらに関心が高まるきっかけとなるように」と挨拶。東北学院大学の佐川正敏教授が東アジアにおける塔と舎利の奉安形式の変遷と平泉への影響について、「考古学からみた仏教文化の東漸の諸相と仏都平泉の形成」と題した基調講演を行い、その後、平泉町教育委員会の「無量光院跡第34次調査」、岩手県平泉遺跡群調査事務所の「柳之御所遺跡の調査」等の発掘調査の成果が報告されました。

更に岩手大学と岩手県教育委員会が取り組んでいる共同研究について、岩手大学平泉文化研究センターの劉教授が「唐代における金銀字経と五臺山金閣寺」と題して報告。国内で最初に紺紙金銀字交書一切経が納められた寺院が中尊寺と言われており、その

ルーツとも言える唐時代の金銀字経の成り立ちと発展について詳細に説明しました。

また平泉文化研究センターの兼務教員である理工学部の會澤助教が「ポータブル複合エックス線分析による白磁と青磁の胎土分析」と題して報告。奥州藤原氏は、中国南方地域の陶磁器を多数使用しており、特に壺や水注類に対する需要の高さが注目されています。平泉から出土した陶磁器の産地推定や流通経路などを解明するためポータブル複合X線分析装置を用い、浙江省文物考古研究所の所有する陶磁器の測定結果と岩手県が所有する平泉・柳之御所遺跡から出土した陶磁器の主成分の分析結果を、測定データを元に説明しました。

会場に詰めかけた聴講者は熱心にメモをとりながらそれぞれの報告に聞き入りました。



共同研究報告を行う劉平泉文化研究センター教授

date
1.27

キャリアプランニングセミナー

1月27日、図書館生涯学習・多目的学習室において社会人学び直しプログラム「キャリアプランニングセミナー」を仙台青葉学院短期大学観光ビジネス学科の小形美樹教授を講師に招き開催しました。本セミナーは三陸復興・地域創生推進機構生涯学習部門が、これから高齢化が加速し労働力の減少が予測され、ますます社会での女性の役割が期待されている状況から、女性を主な対象に今後のキャリアを考える機会を提供することを目的に企画しました。



実体験を踏まえて講演する小形教授

参加者は女性のみならず男性、市民の方、大学生、大学職員等、年齢も性別も経験も様々な方が参加し最初は緊張した面持ちでしたが、小形教授ご自身の経験を交えながらのお話により、緊張が解れ和やかな雰囲気の中で進行していきました。セミナーの前半では、キャリアとは何かについて理論を交えた紹介

をしていただき、後半では参加者をグループに分け、生まれた時から今までの気持ちの変化を知るライフイベントの分析や長期的な職業生活において自身が拠り所となるキャリア・アンカーを探りました。参加者が今まで経験してきたライフイベントを振り返り、グループの中で語り合うことにより、客観的に自分自身を見つめ、自分は何に向いているのか、どこに生きがいを感じているのか等を認識すること

ができました。その他にもキャリアプランを考えるための方法について学び、参加者は熱心に耳を傾けていました。

小形教授は、スタンフォード大学のジョン・D・クランボルト教授が提唱した「偶発的な予期されない出来事によってキャリアは決定される」という理論を紹介し、目まぐるしく変化していく社会の中において、学習を重ね自ら情報を得てキャリアの充実化を目指してほしいこと、更にご自身の体験に基づき過去にマイナスに思えたことも将来プラスに生きてくるという力強いメッセージをいただきました。

最後に、生涯学習部門長の朴賢淑准教授から、今後も地域ニーズに沿ったプログラムを展開していく旨の説明がありました。生涯学習部門では、地域に密着した大学として今後も生涯にわたった学習機会の提供を推進していきます。



本セミナーについて説明する朴准教授

date
2.3

第17回 地域防災フォーラム

地域防災研究センター（三陸復興・地域創生推進機構地域防災教育研究部門）では、2月3日、北桐ホールにおいて第17回地域防災フォーラム「岩手復興モデルの構築—国連防災枠組みと岩手大学の実践—」を開催しました。

第1部は、国連開発計画駐日大使 近藤哲生氏による基調講演「災害リスクとSDGs」を行いました。近藤氏は2015年9月に国連総会「持続可能な開発サミット」で採択された「持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals (SDGs)」について紹介しました。SDGsは、2030年までに貧困に終止符を打ち、持続可能な未来を実現することを目的とした、全ての国を対象とする国際社会全体の目標です。世界を変えるため何をすれば良いのか考えるための17個の目標が設定されており、全世界で災害が起こり多くの課題を抱える今日、SDGsは被災地の課題解決の目標と重なる部分があり、その解決策を見出すことが学術関係者に期待されている点などをお話いただきました。また、東日本大震災による地域の防災やコミュ

基調講演講師の
近藤国連開発計画駐日大使

ニティの課題解決に取り組んできた経験から、岩手大学に対して地域の課題を解決に導く人材の育成に努めてほしい旨の期待が寄せられました。

第2部のパネルディスカッションでは、近藤氏、岩淵明学長、南正昭地域防災研究センター長、五味壮平教授がパネリストとして登壇し、震災復興から学び、後世に引継ぐための岩手復興モデルの構築について討論しました。SDGsを参考にしながらグローバルな人材を育成していくことが岩手復興モデルの構築にとって重要である等の意見が出されました。



パネルディスカッション風景

date
2.11

子どもの心と歩みを支えるシンポジウム

三陸復興部門心のケア班では、2月11日に、岩手県釜石地区合同庁舎を会場に「子どもの心と歩みを支えるシンポジウム」を開催しました。

東日本大震災からもうすぐ6年が経過しますが、今になって震災時の記憶や大切な人の喪失を話し出した子供たちが現れています。また今でも津波遊びや震災遊びをしているといった事例なども聞かれます。

一方、ずっと海に近づけなかったが、どうにかしたいと自分の大変だった体験と向き合い始めた大人も現れています。さらに震災に関連した支援の難しさや、もともと地域にあった課題の困難さを感じている支援者もいます。

そのような中、今回のシンポジウムは、震災における心理支援活動のこれまでとこれからを、「子ども」「家庭と地域の協働」といった切り口で捉え、今後の地域援助的な心理支援を考える場となるよう開催しました。

みやぎ心のケアセンター地域支援部長の福地医師による「地域のつながりで支える子どもの育ち」と題した基調講演では、子どもにとって家族・学校・地域といった安全地帯の再構築の必要性、さら



参加者から質問を受けるみやぎ心のケアセンターの福地医師



シンポジウム発表者

にコミュニティ全体の回復を支える視点の有効性を説明。また、※ハイリスクアプローチ（むしめがねのアプローチ）よりも※ポピュレーションアプローチ（ふりかけのアプローチ）が重要と説かれました。

続くシンポジウムでは、福島大学子どものメンタルヘルス支援事業推進室の高橋特任准教授、NPO法人子どもグリーフサポートステーション陸前高田スタッフの大塚氏、みやぎ心のケアセンターの福地地域支援部長、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構の佐々木特任准教授から、福島・宮城・岩手県でそれぞれ行われている活動が紹介され、参加者と一緒に家庭と地域の協働について考えていきました。

参加者からは、「子どもの心をどのように支えていくのか。そのために自分自身、何を出来るのか。考える材料を頂いた」、「個人を支援するために、その大元には地域を変える必要があることを学んだ」、「子どもを支える大人、地域への支援、地域再生、支援のあり方など多岐にわたる内容で、とても興味深く拝聴させていただいた」などの感想が寄せられました。

なお、今回のシンポジウムは、音楽グループ「スターダスト☆レビュー」とファンの皆様の寄附を受けて開催しました。

※ハイリスクアプローチ（むしめがねのアプローチ）とは、危険度がより高いものに対して、その危険度を下げるよう動きがリスクをさげる手法
※ポピュレーションアプローチ（ふりかけのアプローチ）とは、集団全体として動きかける方法や環境整備をする手法



シンポジウム発表者
(福島大学子どものメンタルヘルス支援事業推進室：高橋特任准教授)



シンポジウム発表者
(NPO法人子どもグリーフサポートステーション陸前高田スタッフの大塚氏)

シンポジウムを終えて：担当教員から



三陸復興・地域創生推進機構三陸復興部門心のケア班 特任准教授

佐々木 誠

心のケア班の研修活動は、心のことについて触れる機会を作ることが目的の1つです。それは、復興のため前を向こう!という雰囲気の中で、実はまだどきどきするとか亡くした人について語ろうとすると、復興と逆行するような目で見られることがあり、特にも心のことについて言うのはばかられるという暗黙の溝を埋めたいという思いからです。そういう背景を持つ市民講座は、平成27年度までに24講座開催され300人の方々を受講いただいています。今年は支援も5年を過ぎ、被災各県から講師をお呼びしてシンポジウムを開催しようと考えました。ほかに、5年目にして子どもが喪失を語り始めたという事を耳にし、やはり出来事をその人の中に収めるには、その人なりの時間があるといいというメッセージを発信したかったということもあります。

今回、沿岸というアクセスの悪さもありながら、約60名のご参加をいただき、遠くは山陰地方からのご参加もいただきました。この場を借りてご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。福島大学の高橋先生からは「福島はいつも別格の扱いを受けるけれども、今回、このように同じ被災地で活動するものとして一緒に呼んでいただいた事が

とても嬉しい」という趣旨のお話をいただき、お声がけをしてよかったですと感じました。実際、感想の中に「福島の様子が知れてよかった」と複数の回答をいただきました。

また、基調講演の福地先生からは、先の記事の中にあつたポピュレーションアプローチ（ふりかけのアプローチ）のお話を聞き、市民講座のちらしは参加・不参加に関係無く「ちらし自体に意味がある」と信じて配布してきた事への理論的な裏付けとなり、これでよかったという自信を持つ事ができました。まだ反応は起こりうる、心のことを語っても良いというような心理学の知見をこれからも市民講座やシンポジウムで発信することで、人々の間にある暗黙の溝を埋める役割を担っていければと思います。

最後になりましたが、今回のシンポジウム開催にあたり、音楽グループ「スターダスト☆レビュー」とファンの皆様に感謝申し上げます。スターダスト☆レビューの皆様は、東日本大震災以降、継続的にコンサート会場でファンの方々に義捐金を募ったり、チャリティーライブなどを開催しております。

昨年はその義捐金の一部を岩手大学にご寄附頂き、そのおかげで今回のシンポジウムを開催することが出来ました。このように現在でも被災地に心を寄せている皆さんの想いを大切にしながら今後も活動していきたいと思っています。

岩手大学三陸復興・地域創生推進機構では、**「釜石サテライトこころの相談ルーム」**

(〒026-0001 岩手県釜石市平田第三地割75-1) を開設しています。臨床心理士の資格を持つスタッフが無料で相談を受け付けております。

【相談内容】震災に関わる PTSD・喪失・生活の変化をはじめ、支援者とのコンサルテーションや震災にかかわらず家庭、不登校、進路などの相談。

相談予約は、岩手大学人文社会科学部こころの相談センター (Tel:019-621-6848、月～金曜日の10:30～12:30) へお電話下さい。

date
2.15

全国水産系研究者フォーラム

三陸水産研究センター（三陸復興・地域創生推進機構三陸水産教育研究部門）では、2月15日に、国立研究開発法人科学技術振興機構とともに、第6回全国水産系研究者フォーラムを開催しました。

このフォーラムは、科学技術イノベーション創出の一環として次世代の水産産業創生に向けたネットワーク形成の場に位置づけ、知のネットワークを最大限に活用して三陸地域の水産産業復興を目指すという趣旨のもと、東日本大震災後、毎年開催しています。

基調講演では、全日本漁港建設協会会長・公立はこだて未来大学名誉教授の長野章氏が「復興後の水産産業の姿」と題した講話を行いました。

長野全日本漁港建設協会会長は、総合化された水産産業の技術革新、漁村（地域）における共同体の活動、漁港（基盤整備）の活用の3つが進むことで復興後（20～30年度）の水産産業の姿が描けると提言。

基調講演後は、「水産産業と自然災害 被災・復旧と将来に向けた取り組み」をテーマに、産・学・官のそれぞれの立場から事例を紹介しました。

さらに「災害を乗り越えて：水産産業の今、そして未来」と題したパネルディスカッションでは、愛媛大学社会連携推進機構の山内教授をモデレータに迎え、「今、何故地域と大学なのか」、「今、水産産業に何が起きているのか」、「災害に強い水産産業に向けて何が必要か」、「災害復興後の水産産業の姿とは」、「地域の課題を解決するためのネットワークの必要



基調講演講師の
全日本漁港建設協会・長野会長

性」をキーワードに、活発な意見交換を行いました。

パネラーの（有）清水川養鱒場の高橋氏から大学に対し、「男性に比べ体力的に不利な女性でも水産産業に参画できるよう、作業を省力化・自動化するためのロボットやアシストシステムを開発して欲しい」と期待が寄せられました。

今後の水産を支える上で重要となる人材養成の面では、岩手大学の岩淵学長が今年度農学部設置した食料生産環境学科水産システム学コースを例に挙げ、水産増殖・加工流通・マーケティング分野といった水産全体を俯瞰出来る人材を育てていきたいとコメント。

また金沢大学の山崎学長からは、能登半島にある環日本海域環境研究センターを拠点として取り組む海洋生物資源に関する教育や養殖技術の開発などの水産構想が紹介されました。

その他のパネラーからも様々な意見や提言があり、オールジャパンのネットワーク構築の重要性を会場の参加者と一緒に再確認するとともに、今回のフォーラムの内容を今後の活動に繋げていくこととしました。



パネルディスカッション風景

date
3.10

生産技術研究センターシンポジウム

ものづくり技術研究センター生産技術研究部門／生産技術研究センター（三陸復興・地域創生推進機構ものづくり技術教育研究部門）では、3月10日に、花巻市、花巻市技術振興協会、花巻工業クラブの後援を受けて、ホテルグランシェール花巻にて平成28年度岩手大学生産技術研究センターシンポジウム「環境との調和 自然の力を活用した先端科学技術」を開催しました。

主催者挨拶では、小川総務担当理事が全学組織となったものづくり技術研究センターにおける生産技術研究センターの役割を説明する共に、これまで取り組んできた複合デバイス技術を元に、農学系分野、社会科学系分野まで含めたものづくり技術の総合的研究拠点としての展望を紹介しました。



主催者挨拶する小川理事

シンポジウムでは、農学部附属寒冷バイオフィロンティア研究センター・伊藤教授の「発熱植物ザゼンソウの不思議：植物の体温調整のしくみに学ぶ」、研究推進機構・木村准教授の「ポルフィリンとフタロシアニン：特性と機能性色素としての利用」、公益財団法人神奈川科学技術アカデミー・落合



講師の大阪市立大学複合先端研究機構・南郷特任教授

主任研究員の「光触媒の現状と未来への展望：快適で持続可能な社会のために」、大阪市立大学複合先端研究機構・南郷特任教授の「自然に学ぶ人工光合成：バイオソーラーデバイスへの展開」の順に講演を行いました。「環境と調和」をテーマに多角的な研究の取り組みを紹介する本シンポジウムには、企業・自治体・研究者の他、大学生や高校生も参加し、今回のテーマに関する関心の高さが伺われました。

また、講演の間には、生産技術研究センターの研究に関連するテーマのポスターセッションが行われ、熱心な質問や意見交換が行われました。

生産技術研究センターでは、地域産業の活性化と人材育成を推進していくため、新技術応用展開部【花巻サテライト】を設置している花巻市を中心に、このようなシンポジウムを開催し、先端科学技術や岩手大学の研究シーズを広く紹介しながら様々な産業にとつて有用な生産技術の創造と実用化に取り組んでいきます。



ポスターセッション風景

date
2.20

岩手大学地域連携フォーラム in 久慈

岩手大学では、現在、県内13自治体と文化、教育、学術の分野で支援及び協力するために相互友好協力協定を締結しています。さらに実践的な取組として、相互友好協力協定締結自治体のうち久慈市を含む5市と共同研究を行い、三陸復興・地域創生推進機構地域創生部門に市職員を共同研究員として受け入れています。

今回、久慈グランドホテルを会場に「岩手大学地域連携フォーラム in 久慈」を開催。これまで久慈市との連携により、取り組んできた様々な活動を広く一般の方々に紹介しました。

冒頭、菅原復興・地域創生担当理事が、「岩手大学による地域創生への取り組み」と題して、28年度に設置した三陸復興・地域創生推進機構の概要、さらに学士及び修士課程の改組ポイントなどを説明。

続いて、久慈市役所内に設置している岩手大学久慈エクステンションセンターの川尻特任専門職員から、地域の一次産業分野における共同研究や小学校、高校等との連携事業などの紹介を行いました。

久慈市派遣の宮本共同研究員からは、地元企業の久慈琥珀(株)との共同研究において、農学部の木村教授が久慈産琥珀抽出物から発見した抗アレルギー活性を有する新規物質 kujigamberol (※木村教授が東日本大震災の被害から久慈市が復興するように、久慈頑張ろう=クジガンパロールと命名)のエピソードと、さらに化粧品OEM企業の(株)実正が加わって誕生した久慈産琥珀抽出エキス配合化粧品の事例紹介がありました。これを受けて木村教授は久慈産琥珀抽出エキスの研究概要と今後の展開について説明を行いました。

この商品は、平成18年度に久慈琥珀(株)から相談を受けた初代の久慈市派遣の共同研究員が木村教授に繋ぎ、そのあとに続く歴代の共同研究員がそれぞれの研究ステージで外部資金を獲得して5代目と



主催機関を代表して挨拶する岩渕学長



菅原復興・地域創生担当理事



久慈エクステンションセンター川尻特任専門職員長



宮本共同研究員(久慈市派遣)



農学部 木村教授

なる宮本共同研究員で商品化されたものであり、まさに久慈市と岩手大学が二人三脚で取り組んできた産学官連携の象徴的な商品でもあります。

その他の事例発表では、COC+事業「起業家人材育成プロジェクト」の一環として、県内での起業を目指す学生を対象に起業マインドを助成することを目的として開講しているいわてキボウスター開拓塾の第1期生の学生グループから、ワサビやホヤで作ったマスクプレーヤフェイスパックなどの新商品を紹介。

また、岩手大学と久慈高校と高大連携で取り組んだ国体盛り上げ企画について、ワークショップ、フィールドワークプロトタイプ実演、国体当日の順に沿って久慈高校生のグループに発表頂きました。



いわてキボウスター開拓塾 チームエキス



久慈高校 国体盛り上げ企画グループ

フォーラムの総括として久慈市の遠藤市長から、「市内の企業の皆さんに岩手大学との産学連携についてもっと知って欲しい。また岩手大学にはフィールドワークの場として久慈市を活用して欲しい」などのコメントを頂きました。岩渕

学長からは、「久慈産琥珀の産学連携商品以外でも水産分野など多様な分野で連携できるのでこのネットワークを活用して欲しい」とコメント。またフォーラムに参加された市内企業からは、岩手大学の研究の情報を知りたいのでこのようなフォーラムを継続して欲しいなどの感想が寄せられました。



全体の発表を受けてコメントする久慈市・遠藤市長(右から2番目)

●平成28年度岩手大学地域連携フォーラム in 久慈

日時：平成29年2月20日(月) 15:00-17:40

- 開会
- あいさつ 岩手大学長 岩渕 明
久慈市長 遠藤 譲一
- 報告
 - 岩手大学による地域創生への取り組み
岩手大学理事(復興・地域創生・男女共同参画担当)・副学長 菅原悦子
 - 久慈エクステンションセンターの活動紹介
岩手大学久慈エクステンションセンター 特任専門職員 川尻 博
 - 久慈市と岩手大学の産学官連携活動
岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 共同研究員(久慈市派遣) 宮本幸治
- 事例発表
 - 久慈産琥珀からの人類への素敵な贈り物 岩手大学農学部 教授 木村賢一
 - 新商品「エタノール・エキス」の開発と販売戦略
～いわてキボウスター開拓塾 第1期の報告～
チームエキス(甲田 大和、小田 彩)
 - 高大連携で取り組んだ国体盛り上げ企画
久慈高校(林 登生、日當 歩、前田 歩夢、道合 勘太)
- 総括 岩手大学長 岩渕 明
久慈市長 遠藤 譲一
- 閉会

(久慈琥珀(株)×農学部 木村賢一先生)



外部資金獲得 H27 化粧品発売

H18 久慈琥珀(株)×木村先生

H24 久慈琥珀(株)×木村先生×実正

平成18年



初代共同研究員

平成20年



2代目共同研究員

平成22年



3代目共同研究員

平成24年



4代目共同研究員

平成26年



5代目共同研究員

久慈産琥珀抽出エキスを配合した化粧品完成までの流れ
※岩手大学地域連携フォーラム in 久慈 宮本共同研究員の発表資料から

ものづくり技術教育研究部門の紹介

ものづくり技術教育研究部門は、ものづくり技術研究センターと連携して活動が行われています。ものづくり技術研究センターは、これまで岩手大学が蓄積してきた金型技術、鋳造技術及び複合デバイス技術等、工学系分野の実績を活かし、これに農学系分野、社会科学系分野まで含めた全学体制でのものづくり技術の総合的研究拠点です。

センターには「金型技術研究部門」、「鋳造技術研究部門」及び「生産技術研究部門」が置かれ、それぞれ「金型技術研究センター」、「鋳造技術研究センター」及び「生産技術研究センター」と称しています。

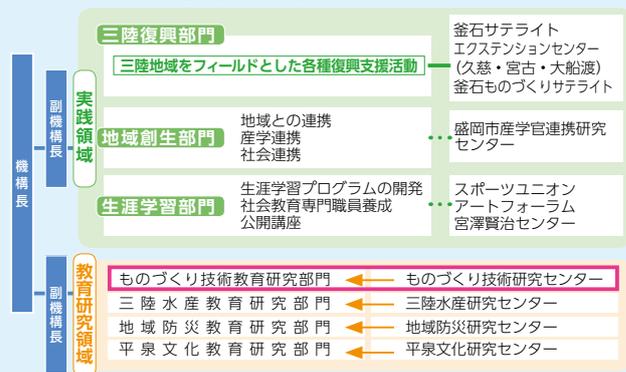
金型技術研究センターでは、金型技術に関する「技術研究の高度化」「国際的な拠点の形成」「先端的水準の研究結果の地域産業への提供」「高度専門技術者の育成」「新技術・新商品の開発を通じた地域産業等の国際競争力の向上」を目的として、地域と大学との連携のもと、金型の設計、加工、表面処理などの要素技術とプレス加工、モールド加工の応用技術の研究開発を通して、地域の産業振興を図ります。なお、北上市にサテライトを設置しています。

鋳造技術研究センターでは、鋳造技術に関する「研究開発」「産学連携」「人材育成」「ものづくり教育」「啓発広報」「国際交流」を目的とし、鋳造技術の研究開発の拠点として基礎研究、産学官連携による

共同研究、学生・社会人、地域技術者の人材育成、地域のものづくり教育支援を行います。なお、奥州市にサテライトを設置しています。

生産技術研究センターでは、生産技術に関する「技術教育」「研究」「地域産業の活性化」「人材育成」など産学官のニーズに対応することを目的に、地域と大学との連携のもと、様々な産業にとって有用な生産技術の創造と実用化に取り組み、地域産業の活性化と人材育成を推進します。なお、花巻市にサテライトを設置しています。

●三陸復興・地域創生推進機構組織図



共同研究員だより

花巻市共同研究員
伊藤 玲



岩手大学と花巻市は、平成14年に相互友好協力協定を締結し、平成19年1月には工学部に複合デバイス技術研究に関する研究部門を立ち上げるとともに、花巻市起業化支援センター内には複合デバイスに関連する製品開発や花巻市内の企業に対する技術普及や技術相談、イノベーション誘発などにより技術の高度化などを目的とした花巻サテライト(ものづくり技術研究センター生産技術研究センター)が設置されています。

共同研究員

花巻市では、まちづくり、生涯学習、産業振興、福祉、スポーツ、教育、文化などの多種多様な業務があります。その中で、「花巻市における産学官連携による地域企業のイノベーションに係る実践的スキームに関する研究」を行っております。要約しますと産業の活性化です。市内の製造業の技術を活かし、産学官が一体となった技術の高度化や人材育成を支援しております。

今後の展開

地域の「困りごと」を、花巻サテライト、花巻市起業化支援センターや公設研究所等と共に把握・解決に努めていきます。電子顕微鏡等を使った表面評価は製品の品質改善に有効で企業からも好評を得ております。このような企業ニーズの蓄積が研究テーマとなり地域貢献へと繋げて参ります。

また、花巻サテライトが設置されている花巻市起業化支援センター内には、十数社の企業が入居しており、その入居企業との連携により学生が地域企業を知る機会の提供や、企業の技術力を高める活動を複合的に取り組んでいけると考えております。

さらに、学生が中心となった※岩手大学ぶどう部や※いわてキボスター開拓塾などの支援を行いながら、人口減少、地域創生、人材の確保などの課題解決を図りたいと考えております。この課題を解決するには、岩手大学 理工学部×人文社会科学部×教育学部×農学部×学生の「知」を結集した取り組みが解決への糸口と考えておりますので、皆さんよろしく申し上げます。



Hanamaki シンポジウム



ぶどう部の発表風景

※岩手大学ぶどう部とは— 岩手大学では学生による地域に根ざした独創的な取り組みを支援するLet'sびざんプロジェクトという制度があります。岩手大学ぶどう部は、平成28年度Let'sびざんプロジェクト採択団体です。具体的には、大迫町のぶどうづくりの現場と学生を繋ぎ、多くの人に大迫町の魅力を伝え、地域を盛り上げるために様々な活動を行っています。
※いわてキボウスター開拓塾とは— 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)の「起業家人材育成プロジェクト」の一環として、雇用創出・若者の地元定着を促進するため、県内での起業を目指す学生等を対象に起業マインドを醸成する実務教育を展開しています。